

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 14 日現在

機関番号：13201

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2015

課題番号：25770145

研究課題名(和文)朝鮮語漢文訓読資料(釈読口訣資料)の飛躍的解読研究

研究課題名(英文)An advanced study of Korean Hanmun Hundok (So-ktok Kugyo-l) materials reading

研究代表者

上保 敏 (JOHO, Satoshi)

富山大学・人文学部・准教授

研究者番号：80553114

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、釈読口訣資料における口訣の懸吐された漢字について、漢文訓読の伝統は15世紀中葉の訓民正音創制以後に刊行された諺解資料に引き継がれているのではないかと、という前提のもと、それら諺解資料における漢文原文に対する諺解様相に立脚して、その読法を考察したものである。その結果、釈読口訣資料における訓読の様相は、15世紀末期以降に刊行された非仏教系(儒教系)の諺解資料と多くの類似点が見られ、これらの諺解資料が釈読口訣資料の読法を考察していく上で重要な位置を占めていることがわかった。

研究成果の概要(英文)：In this study, we researched how to read Hancha(漢字) with Kugyo-l(口訣) markings in So-ktok Kugyo-l(釋讀口訣) materials based on the premise, that the tradition of Hanmun Hundok(漢文訓讀) has been succeeded to O-nhae(諺解) materials since the mid-15th century, the promulgation of Hunmin Chyo-ngu-m(訓民正音), and based on O-nhae(諺解) system in these O-nhae(諺解) materials. As a result, it became clear that Hundok(訓讀) systems of So-ktok Kugyo-l(釋讀口訣) materials have much resemblance to the Non-Buddhist(Confucian) O-nhae(諺解) materials since the end of 15th century, and these O-nhae(諺解) materials occupy an important position to consider the reading methods of So-ktok Kugyo-l(釋讀口訣) materials.

研究分野：朝鮮語学

キーワード：言語学 朝鮮語学 漢文訓読

1. 研究開始当初の背景

(1) 朝鮮半島でも漢文訓読が行われていた

現代朝鮮において、漢文を読む際には、ところどころに口訣あるいは吐とも呼ばれる朝鮮語の助詞や語尾類を挿入して句読を切りつつも、漢文原文に現れる各漢字を朝鮮漢字音でもって上から順番に1字ずつ直読をする。日本の漢文訓読のように、語順を入れ替えて朝鮮語の語順で読むこともなければ、個々の漢字を訓読する習慣もない。

ただし、朝鮮半島においてもかつて漢文訓読が行われていたことは、歴史書である『三国史記』[1145年]や『三国遺事』[13世紀後半]等の記録により推定されてきたところであり、1973年に『旧訳仁王経』が発見されたことにより、名実共に立証されるに至った。その後、朝鮮語漢文訓読資料(釈読口訣資料)は、高麗時代のものとして信じられる資料として主要なものが5種ほど発見されており、それらについてはさまざまな研究が為されている。また漢文訓読は李朝時代においても為されていたことが、安秉禧(1976)や南豊鉉・沈在箕(1976)、藤本幸夫(1992, 1993)などの諸研究により指摘されており、李朝時代中期の実際の資料も数点ながら報告されている。さらに2000年には、角筆による漢文訓読資料(点吐口訣資料)も発見され、この方面の研究はますます活発に為されているところである。

(2) ただし、資料の解説は未だ困難を極めている

それにもかかわらず、釈読口訣資料の解説は、『旧訳仁王経』の発見後40年近く経過した現在に至っても、未だ満足いく成果を収めていないのが実情である。その理由としては、日本の漢文訓読に見られるような残存資料の分量の豊富さ、漢文訓読の読法を記した古辞書類の伝承、漢文訓読自体の現代までの継承、などの好条件を、朝鮮においてはことごとく欠いている点が大きいように思われる。それ故に、従来の国内外の研究でもその読法を断定するにはほど遠い状況が続いており、十分な根拠の薄い読法案が種々発表されているのが実情である。

(3) 本研究代表者は、ハングル資料との関わりを追求してきた

本研究代表者は、こうした状況を克服すべくさまざまな研究を推し進めてきたが、その中でとりわけ注目してきたのが、ハングル資料であった。15世紀中葉のハングル創制以後、数多くの文献がこの新文字によって記録されたが、その大部分が諺解資料と呼ばれるものである。諺解資料は、主として仏教や儒教の経典を朝鮮語に翻訳した翻訳資料にあたるものであるが、漢文原文にハングル口訣を施した口訣文とその朝鮮語訳である諺解文が常に併記される様式が原則である。従来の国内外の朝鮮語学では、こうした諺解資

料に対し、諺解文を漢文原文の単純な翻訳文とのみ見なし、両者の関係性をそれ以上深く追求するものが見られなかった中、本研究代表者は、諺解文を漢文訓読の結果による書き下し文と見なす、という、従来の研究に見られない観点を導入することにより、漢文訓読のさまざまなあり方を、諺解資料をもとに再構築する研究を執り行ってきた。2012年7月には、この研究により東京大学より博士学位を授与されたところでもある。

いま、こうした観点からの研究をさらに躍進させ、釈読口訣資料の読法の断定へと進んでいくのが、『旧訳仁王経』の発見後40年近く経過した朝鮮語漢文訓読資料の研究、ならびに朝鮮語史研究において、きわめて急務な課題となっている。

2. 研究の目的

その上で、本研究では、高麗時代の釈読口訣資料において、口訣の付された個々の漢字の読法を具体的に明らかにしていくことを最大の目的とした。その際、釈読口訣資料に見られる漢文訓読の伝統は、15世紀中葉の訓民正音創制以後に刊行された諺解資料に引き継がれているのではないかと、いう前提のもと、それら諺解資料における漢文原文に対する諺解様相に立脚して、その読法について考察した。

3. 研究の方法

上記の目的のために、本研究では以下の3点について、年次ごとに計画的に実施することとした。

(1) ハングル資料をもとにした漢文訓読の読法の分析

先に述べたように、諺解資料の諺解文を漢文訓読の結果による書き下し文と見なすことにより、15世紀中葉のハングル創制以後に刊行された諺解資料をもとにして、当時の漢文訓読の読法を解明する作業をする。本研究代表者は、これまでの研究で15世紀中葉の仏教系の諺解資料については分析を進めてきているため、本研究期間には、特に15世紀末期以降の儒教系(非仏教系)の諺解資料について、データ化および分析を推し進めた。

(2) 朝鮮語漢文訓読資料(釈読口訣資料)に書き込まれた口訣のデータ化

高麗時代の釈読口訣資料の読法の考察のための基礎的な作業として、同一漢字に見られる種々の口訣の書き込みについてデータ化し、その索引を作成した上で、考察を進める。これは、釈読口訣資料の読法の考察の上できわめて基礎的な作業であるにもかかわらず、従来の研究で、体系的に執り行われた

ことがなかった。

(3) 朝鮮語漢文訓読資料(釈読口訣資料)の読法の考察

上記の(1)と(2)をつき合わせ、釈読口訣資料の読法の考察へと研究を推し進めた。その際、従来より進めてきた仏教系の諺解資料の読法も参照しつつ、本研究期間に重点的に実施する(1)の分析結果を重要視して、釈読口訣資料の読法の考察を進めていった。その際、朝鮮語史のその他さまざまな資料や研究、日本の漢文訓読研究の成果などを参照するのは言うまでもないことである。

これらの作業を、コンピュータソフトウェアの活用、原本調査の実施、内外の著名な研究者との研究情報の交換、関連する研究図書との参照等をもって、多角的に執り行った。

4. 研究成果

本研究では、先に述べたごとく、釈読口訣資料に見られる漢文訓読の伝統は、15世紀中葉の訓民正音創制以後に刊行された諺解資料に引き継がれているのではないかと、いう前提のもと、それら諺解資料における漢文原文に対する諺解様相に立脚して、その読法の考察を執り行った。ただし、研究を執り行う中、資料の量が膨大であることが判明したため、中でも、末音添記や全訓読表記が為されている語、とりわけ副詞語のいくつかの語に注目するとともに、併せて15世紀中葉以降のハングル資料との関連性についても力点を置くこととした。その結果は、次のように要約することができる。

(1) 高麗時代の釈読口訣資料と15世紀中葉以降のハングル資料、さらには16世紀以降においても、一貫して同一の読み方がされているもの(「況」、「當」、「亦」など)

これらの漢字は、時代、資料の種類を問わず、一貫して同一の読み方がされているものであり、その点において、それらの読法が当該漢字に対する訓として固定化しており、訓の連続性が確認できるものであると言える。言い換えると、本研究の基本的な方法論であるハングル資料をもとにした釈読口訣資料の読法の考察が、当たり障りなく有用に行うことのできる例であると言え、読法の推定も、比較的容易に執り行うことのできるものであった。

(2) 高麗時代の釈読口訣資料と15世紀末期あるいは16世紀以降のハングル資料との間で共通した読み方が確認できるのに対して、15世紀中葉のハングル資料では、これとは異なる読み方がされている、または15世紀中葉のハングル資料にはその読み方がまったく見られないもの(「與」、「及」、「各」、「更」、

「共」、「并」など)

これらの漢字は、基本的に高麗時代の釈読口訣資料と15世紀末期あるいは16世紀以降の諺解資料とで共通した読み方が確認できるのに対して、15世紀中葉の諺解資料では、これとは異なる読み方がされているものである。なかには、釈読口訣資料と15世紀末期あるいは16世紀以降の諺解資料とで共通した読み方が確認できるのに対して、15世紀中葉の諺解資料にはその読み方がまったく見られないものもあった。すなわち、先の(1)の例に見た漢字とは異なり、時代、資料の種類を問わず、一貫して同一の読み方がされているものとは言えず、その連続性が認められないものである。従って、本研究の基本的な方法論である諺解資料をもとにした釈読口訣資料の読法の考察を行う際に、資料の取り扱いについて注意を要する例であると言える。

(3) 15世紀中葉の資料はほとんどが仏教系の資料であるのに対して、15世紀末期、及び16世紀以降の資料は儒教などの非仏教系の資料が多くなる

こうした現象をどのように捉えたらよいかは難しいところであるが、ここで、15世紀中葉の諺解資料はほとんどが仏教系の資料であるのに対して、15世紀末期、及び16世紀以降の資料は儒教などの非仏教系の資料が多くなる、という点に注目したいと思う。つまり、仏教系と非仏教系との間のやや異なる言語使用、さらに言えば、やや異なる漢文訓読の伝統が、時代を異にして現れた、と考えるのである。

もちろん、(1)で見た「況」、「當」、「亦」のように、釈読口訣資料の読み方が15世紀中葉の仏教系の諺解資料と共通しているものもある。ただし、これらは、15世紀中葉の仏教系の諺解資料と15世紀末期以降の非仏教系の諺解資料とでも、基本的に共通した読み方がされるものである、という点を看過してはならないだろう。

いずれにしても、釈読口訣資料の読法を考察していく上で、15世紀末期以降の非仏教系の諺解資料が非常に重要な位置を占めている、という点は、明らかになったと言える。さらに、今後、釈読口訣資料の読法を考察していく際には、偏に、15世紀末期以降の非仏教系(儒教系)の諺解資料を参照する必要があると考えられる。

(4) 朝鮮語漢文訓読系討論へ

近年、釈読口訣資料に関する研究が深化する中、その系統を分別することの重要性については、しばしば指摘されてきた。たとえば、華嚴経系統、瑜伽師地論系統などがそれである。また、こうした系統については、角筆による釈読口訣資料の解読を進める中でも、積極的に援用されてきた。

ただし、この系統という点に着目するのであれば、15世紀以降の諺解資料との関係、と

いう点においても、系統を考慮すべきでないかと思われる。その点、釈読口訣資料が、とりわけ、15世紀末期以降の非仏教系(儒教系)の諺解資料と深い関連性を認め得る点については、今後、より多くの用例を検討しつつ、検証すべき課題であると考え。

今後も研究期間に得られた知見やデータをもとに、朝鮮半島にかつて存在した漢文訓読について、幅広い視点から接近し、特に「朝鮮語漢文訓読系討論」を新たに築き上げていく計画である。また、本研究の成果は、本務校の学部及び大学院における朝鮮語学関連の専門教育にも積極的に還元する予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

上保 敏 (2015)「15世紀諺解資料における「2字漢語」の扱いについて」、『富山大学人文学部紀要』第63号, pp.72-103, 富山大学人文学部[査読無].

JOHO, Satoshi (2014), Reading Söktok Kugyöl materials based on Ōnhæ materials, “Acta Linguistica Asiatica” Vol 4, No 1, pp. 43-68, Znanstvena založba Filozofske fakultete Univerze v Ljubljani[査読有].

DOI: <http://dx.doi.org/10.4312/ala.4.1>

[学会発表](計1件)

JOHO, Satoshi (2014), “A Study of Söktok Kugyöl materials reading based on Ōnhæ materials”, 2nd Korean International Symposium of the Department of Asian and African Studies, Faculty of Arts, University of Ljubljana, ‘Understanding Chinese Characters and Cultures in East Asia’, 於 リュブリャナ大学(スロベニア), 2014年6月26~27日.

[図書](計1件)

上保 敏 (2016)『釈読口訣資料被懸吐漢字 KWIC 索引』富山大学人文学部朝鮮言語文化研究室, 全272ページ.

6. 研究組織

(1)研究代表者

上保 敏 (JOHO, Satoshi)

富山大学・人文学部・准教授

研究者番号: 80553114